The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞森勇太著『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』
Author(s)	高谷, 由貴
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 185-186
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70998
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

森勇太著『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』

高　谷　由　貴

1．はじめに

本書は日本語の授受表現の特徴の形成過程について、敬語との相互関係から明らかにした研究書である。以下、2節で本書の構成を述べ、3–5節で筆者が指摘した新たな知見を中心に概観し、6節で全体のまとめを行う。

2．本書の構成

本書は全3部10章から成っており、構成は以下の通りである。

Ⅰ　授受表現・敬語の構造と歴史

第1章　授受表現の歴史的研究と敬語・発話行為

第2章　授受表現と敬語の構造

第3章　授与動詞「くれる」の視点制約の成立

第4章　補助動詞「てくる」の成立

Ⅱ　行為指示表現から

第5章　行為指示表現の歴史的変遷

第6章　近世上方における連用形命令の成立

Ⅲ　行為拘束表現から

第7章　申し出表現の歴史的変遷

第8章　オ型謙譲語の用法の歴史

第9章　前置き表現の歴史的変遷

第10章　授受表現と敬語の相互関係の歴史

3．授受表現研究史と問題提起

第1部では、研究史の概観と問題提起を行っている。授受表現の成立時期に言及した宮地（1975）等をふまえ、次の点を問題としている。

一点目は、「くれる」の問題である。先行研究においては授受動詞「やる／くれる／もらう」を同列に扱うことが多かったが、本書は「くれる」のみが持つ視点制約に注目し、その形成過程を論じている。主語に話し手がおかれる用法を〝主語視点用法〟、補語に話し手がおかれる用法を〝補語視点用法〟と呼ぶこととすると、現代語の「くれる」は主語視点で用いることはできず、補語視点でのみ用いられる。ところが、中古語では、主語視点・補語視点のいずれも用例が見られる。この視点制約がどのように形成されたかについて「たぶ」との対照から記述している。二点目は、授受表現の語用論的特徴の形成時期についてである。現代語の依頼表現は「てくれない？」「ていただけませんか？」等、授受表現の使用が重要となるが、この特徴がいつ形成されたかを論じている。

4．行為指示表現の歴史的変遷

本節は第2部の第5章を中心にまとめる。「～なさい」といった尊敬語命令と、「～ください」のような受益表現を使用した尊敬語命令がどのような用法を担ってきたかを論じている。現代語においては、尊敬語命令で「本を読みなさい」と上位者に言うこ

とは不適切とされ、「読んでください」のように受益表現を用いる必要があるとされる。

これについて筆者は、中世末期以降の口語を反映した資料を調査した。その結果、近世までは尊敬語の命令形を、依頼、勧め、命令指示、聞き手利益命令の4つの用法で、上位者に対しても広く用いることができたことを指摘した。それが近代に入ると依頼では用いられなくなり、現代では勧めも上位者に用いることができなくなった。

これに対して受益表現の尊敬語の命令形は、中世末期には依頼の用法が中心であったが、近世以降用法を拡大し、現代では4つの用法の全てで使用できるようになった。筆者はこの変遷の要因として、〝話し手に利益のある事態は与益表現で表さなければならない〟という語用論的制約の成立を主張した。

5. 行為拘束表現の歴史的変遷

本節では、行為拘束表現について論じた第3部のうち、第7章を中心にまとめる。第7章では「てあげる」「てさしあげる」等、話し手が聞き手に利益をもたらすことを表明する「与益表現」を用いた申し出表現を取り上げている。これらは上位者に対して用い難いとされている。例えば、学生から先生に対して次のように発話することは不適切であるとされる。

＃先生、コーヒーを入れてさしあげます。(p.147)

しかし、この状況は近世以前には異なっており、与益表現は上位者に対する申し出を行う際に用いることができた。

そこで筆者は、上位者に対する与益表現を用いた申し出表現が、各時代にどれだけ見られたかを調査した。その結果、当該表現は近世後期までは丁寧な表現として使用されていたが、近代に入ってから待遇的価値が下がったことを示した。その要因としてこれは、他者に恩恵を与えることの表明が、話し手自身を高めてしまうという解釈となるため、控えられるという語用論的制約の成立を指摘した。

6. おわりに

現代語において授受表現を用いることが必須となる環境において、かつては敬語のみで問題なく用いられていた。本書はこの変化の過程を、多様な資料に基づいた調査・分析により明らかにしている。また、その変化が起こった要因として語用論的制約の成立を指摘することで、敬語と授受表現の相互関係を明示的に論じた。授受表現がいつ、どのような意味・環境下で使用されるようになったのかという、多くの人の興味に答えられる一冊であろう。

参考文献

宮地裕（1975）「受給表現補助動詞「やる・くれる・もらう」発達の意味について」『鈴木知太郎博士古稀記念　国文学論攷』pp.803-817、桜楓社.

（ひつじ書房、二〇一六年二月、二三二頁、七、〇〇〇円＋税）

（たかや・ゆき／本学大学院博士後期課程）